おじさんズ通信

２０２１年４月号（Ｎｏ５）
発行元：登別市新生町４丁目桃柿通
緑風舎
発行者：おじさんズ３号

道草すれば

ウマさんに出会った

４月初め、市立図書館で本を借りてから、久しぶりに母校幌別中学校への通学路をウオーキングした。出発前、図書館で会った、かつての仕事仲間のＦ君から「給食センターから少し行くと、馬がいる」と情報提供あり。坂道をエッチラオッチラ上り、道道上登別室蘭線との交点の少し手前まで行くと、いました、いました、おとなしそうなポニーたちが。

積み上げた藁のような餌を食む２頭＝①＝は、こちらの存在に気付かないのか、無視しているのか、いつまでたってもモグモグタイム。ひと回り小さい２頭＝②＝はじっと不動の姿勢だったが、柵に近づくと１頭が寄ってきた。

（ごめんな、なんも餌持ってなくて…）

移動するともう１頭＝③＝、寄ってきてパイプ越しに長い顔を出した。イナナクわけでもない。ただじ～っと、こちらを見ている。柵のこちら側に、説明パネルらしきものが数枚貼られていた。風雨にさらされ、全文判読は不能だが、５頭の中で牡は１頭だけ。「すずちゃん」の弟だという。リーダーは「さくらちゃん」で、「すずちゃん」、「ゆずくん」のお母さんとか。そうか、男の子の名前は「ゆず」か。

ほかに「ニンジン以外は与えないで」とのことわり書きも。このマチのことなら、何でもお見通しのＴ氏に聞くと、近くのナントカ業者さんがペットとして飼っているとか。次は人参を持って、会いにいこう。

故郷史探索記

熱海 勝を追って(1)

史資料が乏しい中にも、どこか人を惹（ひ）きつける歴史上の名わき役はいるものだ。明治初期から幌別郡の開拓にいそしんだ片倉家臣団の中で、とりわけ魅力を感じたその人は「熱海 勝」という男だった。

昨年秋、「文芸のぼりべつ」３９号に掲載された私の創作「幌別村男爵伝」に何度か登場するが、登別市史にその名が記された明治六年を境に、足跡はパッタリ途絶えていた。正しくは、自分が調べきれていない、ということだが。

熱海（あつみ）は、幌別移住当時３６歳前後で開拓役所の会計係を担当。明治４年５月、函館に開拓団の米や家具などを買い付けに行ったが、帰途、運搬船が座礁し、ことごとく海中の藻屑となった。しかし、元家老たちからの信頼は厚かったようで、片倉景光が東京に修学中、旧臣ら勉学費を工面し「右は指し替え白老詰　熱海勝方へ回す」と託した。

ただ、それから先の記録が見つからない。半ば、あきらめかけていたところ、思いがけないところから、熱海の名が浮上した。

予期せぬ子孫との遭遇

片倉家の元家老で札幌開拓の指揮を執った佐藤孝郷。彼が明治３６年に記した「片倉家慶事紀要」を、市立図書館ホームページのおすすめ郷土史料コーナーに載せるため、パソコンで打ち込んでいると、出てきました、熱海勝の名前が。そうか、彼はこの時点で故郷・宮城県白石に戻っていたのだ。

片倉家の慶事とは、景光の長女コウの婿・健吉を養子を迎えるまでの顛末記。景光夫妻に男子は生まれず、せっかく男爵になったものの、男系のみとさ

れていた爵位を維持せんがための家臣らが奮闘した記録でもある。

そこでＳＯＳ発信！　白石市の学芸員、Ｋさんに「熱海姓の人は住んでいますか」と問い合わせると「一軒だけあります」とのこと。なおも調査していただくと、東京に住む勝のひ孫とコンタクトがとれ、メールでのやり取りが可能になった。

「曽祖父・熱海勝のことを調べていたところ、登別のＴさんから情報をいただけるとは、全く想像もしておりませんでした。うれしい限りです」とのメールには、家系譜や戸籍簿の写しが添付されていた。

こちらも、市史「ふるさと登別」に載っている熱海勝関連の記述部分を PDF ファイルにまとめて送信したが。

して、幌別郡における３０年間の熱海一家の生活の軌跡は、いかなるものだったのか。

続きは次号へ。乞う、ご期待！

緊急告知!!

2021年5月1日 冬眠明けオープン

登別映像機材博物館

切株大根に花が咲いた！

昨年暮れから毎朝撮影しては、「おじさんズ」のホームページにその成長記録を載せている大根の切株だが、４月に入ると枯れ始めた葉をバックに１本伸びた茎の先に花を咲かせ始めたから、あら不思議。最後のひと花咲かせましょう、という訳か？

命の終焉まで、記録撮りは続きます。

おバカな実験

タイトルこそ、「バカ」がつくが、意外とまじめな実験かも。

２６年余、新築時から使い続けた居間の蛍光灯具が使命を終えて、ついにあの世に旅立たれた。代わりに来たのが「アイ〇〇」というメーカーの重量２Kg 足らずの「音声操作シーリングライト」。近くで「あかりをつけて」「あかりをけして」とか「あかるくして」「くらくして」と話し掛けると、その通りにオンオフや明かりの調節をしてくれるとか。

前提条件は「アイ〇〇」と、メーカー名を発音して、ピピと鳴ってから５秒以内に声かけすること。既に普及して久しいようで、今更、そんなことに感心しているの？　とあきれる方々もおられましょうが、そこはご勘弁を。

最初は、声を発するたびに消えたり、ついたり、段階的に暗くなったり、家族そろって「面白い～」だったが、家人の一人が疑問を呈した。

「方言で呼びかけたら、動作するだろうか？」

早速、やってみた。

「アエィ〇〇！」

ピピと、鳴らない。

「アイ〇〇」と言ってから「くれぇくして」と呼びかけたが、こちらもだめ。

「津軽弁だと、困るよね」「なんか、標準語を強要されているような」「沖縄の人も困るかも」「地方の方言仕様で作れって、メーカーにクレームが行ってるかも」

あれこれ想像しながら、笑い合ったが、杞憂に終わった。恐らく「あい〇〇」の担当者はこう答えるだろう。

「同梱のコントローラーをお使いください」と。

薫風　烈風

▶　「おじさんズ通信」第５号発行で「カストリ」の域を脱出。春です、春。

▶　ポン友が館主を務める登別映像機材博物館が５月１日から、第７期目の冬眠明けオープンします。仕切り直しの「気合（キアイ）博物館」に、ご支援よろしく。

▶　当方も、５月１日の図書館 HP コンテンツ追加に向け、郷土史料・宮武藤之助の「丈草の記」を電子データ化へ、奮闘せり！　皆さん、お元気で～。